# C－30 衣服構成の基礎研究（第13報）－ゆとり量の考察－

京都女大家政　○高橋純　土井サチヨ　福井保生　畠山絹江　甲斐肇

目的　衣服を構成するには，衣服の周囲寸法に対して，適正なゆとり量を設定する必要がある。それには，正常姿勢時と動作時の，体表寸法の変化を測定し考察することである。胴部原型作図に要するゆとり量を検討するために，動作時における体表の背面変化を考察し，その伸び寸法を用いることを考えた。

方法　資料は1966年～1968年に測定した11才～22－29才の，男子828名，女子816名，合計1644名の測定値を用いた。この測定値の中で検討した項目は，（1）正常姿勢における上部胸囲，乳頭位胸囲，背幅，両肩甲骨下角点間幅，両後腋点間幅，（2）動作時における，上肢90°前方挙上時の肩甲骨下角点間幅，両後腋点間幅である。これら7項目の夫々の伸び寸法，伸び率，および正常姿勢時の背幅に対する両肩甲骨下角点間幅の伸び率，上部胸囲に対する両後腋点間幅の伸び率について考察をおこなった。

結果　胴部原型作図上の基本寸法は，上部胸囲を適当と考える。なぜなら男子においては，上部胸囲が各年令を通じて，乳頭位胸囲よりも大であり，女子においての上部胸囲は，乳房の影響が少なく，個人差が比較的少ないためである。

胴部原型のゆとり量としては，背面の最大伸びを考慮することが妥当であろう。そこで，上部胸囲に対する両後腋点間幅の伸び率を検討したところ，各年令を通じて13～14%となった。これをゆとり量として胴部原型を作図し，天竺木綿を用いて着用実験を行った。実験結果は良好であった。